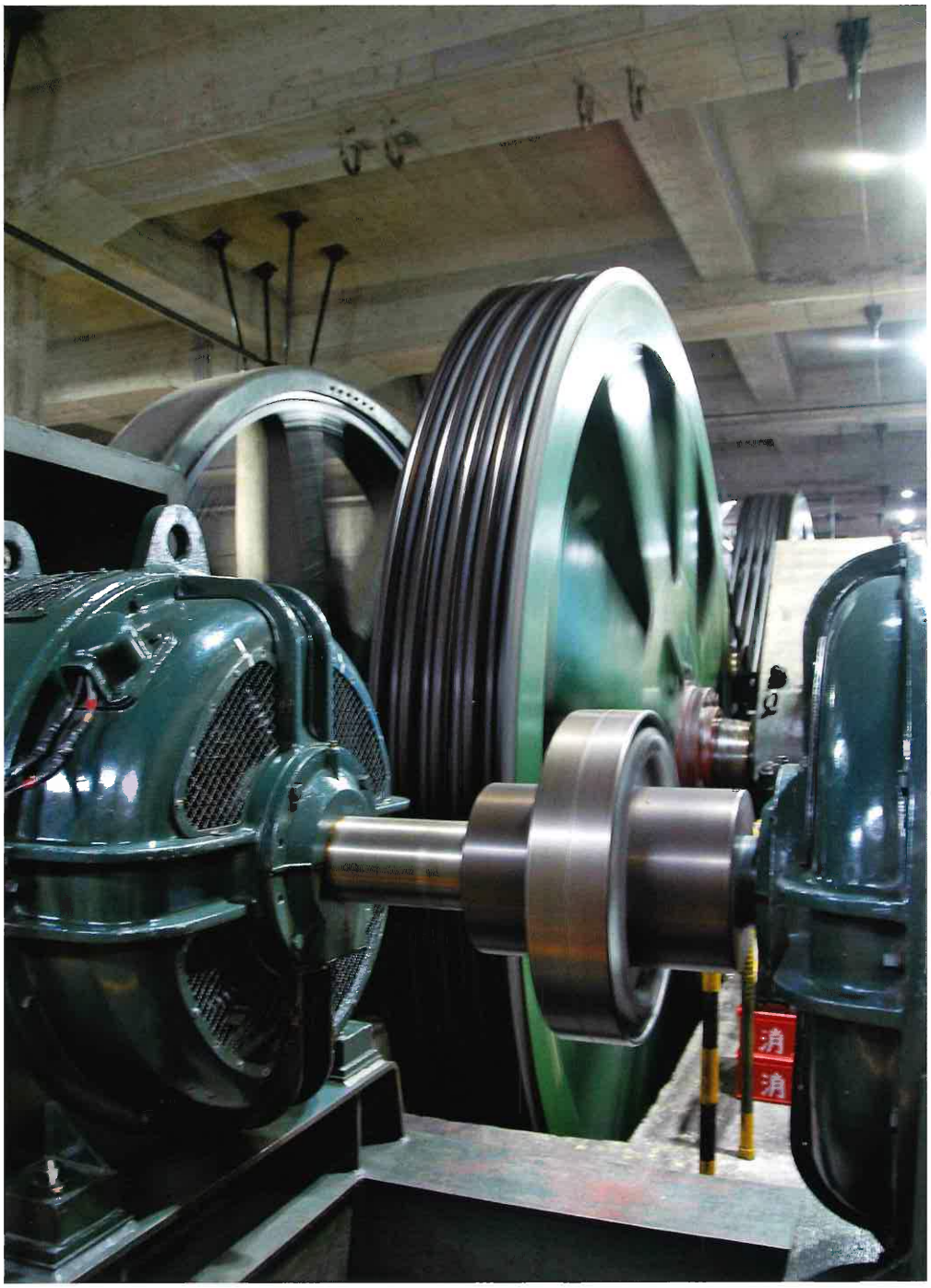
霊宝館だより

題字・畠野光義師

霊宝館だより　第129号
平成31年2月9日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
公益財団法人高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736―56―2029
URL http://www.reihokan.or.jp



高野山駅 ケーブル巻上機
右の緑の車輪が主索輪（しゅさくりん）、左の車輪はモーターの動力を主索輪に伝えるギア（歯車）です。〔詳細は6・7ページ〕

利用案内

開館時間
■11月1日～4月30日　8時30分～17時00分
■5月1日～10月31日　8時30分～17時30分
■休館日　年末年始のみ

■拝観料　大人　600円
高・大学生　350円
小・中学生　250円
高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。
■専用駐車場あり

第129号　目次

平常展のご案内……2～3
収蔵品の紹介101……4
高野山の古建築 第三十三回……5
特集 高野山ケーブルカー車両入替前編……6～7
古絵図で巡る高野山探訪（その九）……8～9
高野山の文書（十六）……10
高野山霊宝館からのお知らせ……11
新連載 高野山でお茶しましょ①……12

平常展
「密教の美術」
開催中～4月14日（日）まで

毎月21日（弘法大師の日）ご来館の方にプレゼントあり！　ホームページ割引券もご利用ください

平成30年度 冬期平常展

「密教の美術」

特別展示

重文　孔雀明王像（快慶作）　金剛峯寺

馬頭観音立像　霊宝館

如宝愛染敷曼荼羅図　金剛峯寺

平成31年1月19日(土)～4月14日(日)

前期　平成31年1月19日(土)～3月3日(日)

後期　平成31年3月5日(火)～4月14日(日)

会期中無休

高野山は、弘仁七年（八一六）空海（弘法大師）により開創されて以来、一二〇〇年もの歴史があります。山上には、総本山金剛峯寺のほか、百十七ヵ寺の寺院があり、たくさんの文化財が伝わっています。

高野山霊宝館は、山内の寺院に伝わる文化財の収蔵、保管、展示を行っており、当展覧会では、これらの収蔵品の中から展示いたします。

主な展示品

彫刻

重　文	孔雀明王像（快慶作）	金剛峯寺
未指定	両頭愛染明王坐像	金剛峯寺
未指定	一字金輪仏頂尊坐像	金剛峯寺
未指定	馬頭観音立像	霊宝館

絵画

未指定	六字名号	宝寿院
未指定	阿字観本尊	釈迦文院
未指定	如宝愛染敷曼荼羅図	金剛峯寺
未指定	十一面観音菩薩八大竜王像	金剛三昧院

高野山町石出土経石（金光明最勝王経）
金剛峯寺

紺綾地錦弘法大師像　金剛峯寺

阿弥陀八大菩薩像　金剛峯寺

十一面観音菩薩八大竜王像
金剛三昧院

孔雀文磬　蓮花院

国宝　紺紙金銀字一切経　金剛峯寺

コーナー展示

高野山の年中行事である法会で本尊などとしてお祀りする絵画や、法会の調度品として使用される書跡などを展示します。

未指定　釈迦三尊十六羅漢像　正智院
未指定　阿弥陀八大菩薩像　金剛峯寺
未指定　楊柳観音菩薩像（伝 呉道子筆）　金剛峯寺
未指定　釈迦涅槃図　西門院
未指定　三千仏像　円通寺
未指定　真然僧正像　金剛峯寺
未指定　薬師十二神将像　金剛峯寺

■書跡

国　宝　紺紙金銀字一切経（中尊寺経）のうち
　大金色孔雀王咒経　金剛峯寺〔前期〕
　孔雀王咒経　金剛峯寺〔後期〕
重　文　紺紙金字一切経（荒川経）のうち
　大孔雀王経　巻上〔前期〕・巻下〔後期〕　金剛峯寺
未指定　細字妙法蓮華経巻第八　金剛峯寺
未指定　明恵上人金剛峯寺巡礼次第　金剛峯寺
未指定　中院流血脈　宝寿院

■工芸

未指定　孔雀文磬　蓮花院
未指定　紺綾地錦阿弥陀如来像　金剛峯寺
未指定　紺綾地錦弘法大師像　金剛峯寺

■考古

未指定　高野山町石出土経石（金光明最勝王経）　金剛峯寺

※文化財の保存上、展示品が替わる場合があります。
※期間中、一部展示替を行います。

収蔵品の紹介 101

一字金輪仏頂尊坐像　一躯

木造漆箔　平安～鎌倉時代（十二世紀）　金剛峯寺蔵

像高七八・〇cm

五の室　金輪塔の御本尊

金輪塔　現在の塔は天保五年（一八三四）に再建されたものです。室町時代にも再建された記録があります。

参考　重文　一字金輪曼荼羅図　遍照光院

この冬は代行バス運行で通りませんが、普段、高野山駅よりバスで街の中心部に向かう際、女人堂を過ぎて「一心口」バス停付近で右手に公園が見えます。この公園には「金輪塔」と呼ばれる多宝塔があり、春は枝垂れ桜、秋は紅葉と共にカメラに収める参拝・観光客の姿が多く見られます。今回紹介する像は、この金輪塔の本尊で、現在は霊宝館に収蔵されています。

一字金輪仏頂尊という名前は、多くの方にはなじみが無いかと思います。ほとけ（仏陀）の頂（最も尊い、あるいは頭のてっぺんという意味でとらえられています）、つまりほとけの最も重要な核となる部分である、優れた智恵を仏格化した仏頂尊（複数の種類・姿があります）の中でも、金剛界大日如来の姿であらわされたほとけで、大日金輪とも呼ばれます。一字金輪曼荼羅の中心となるほとけです。金属製の宝冠と首飾りを身に着けた本像は一見、大日如来そのままのようですが、両手で結ぶ、智拳印の形が少し異なります。大日如来像の場合、正面からだと両手の指は親指以外の八本が見えますが、本像の場合は両手の親指と人差し指しか見えず、それだけ手首を内側に捻っていることがわかります。光背も特徴的で、四〇もの梵字（うち二箇所欠失）があらわされています。

また「仏頂面」という言葉は仏頂尊に由来するといわれ、不機嫌そうな顔を指しますが、本像は比較的穏やかな表情をしています。目には水晶の板を入れる玉眼の技法が施され、制作時期は平安時代末期～鎌倉時代初期と考えられています。

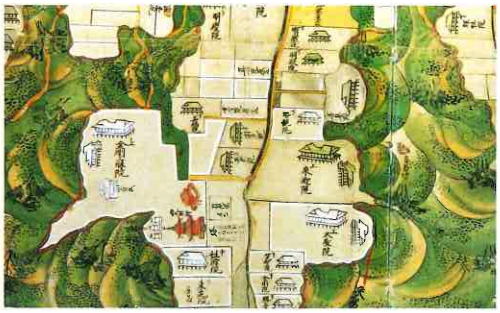
金輪塔は高野山の復興に尽くし、中院流（真言密教の流派）を開いた明算大徳（一〇二一～一一〇六）による創建とされ、大徳が亡くなったのち、この塔に（塔の下、とも）遺骨が納められたと伝えられます。各種文献に本尊像についての記述は名称のみで、詳細は不明です。創建時に本像が作られた可能性もありますが、一字金輪仏頂尊の台座にみられる、七頭の獅子が本像には無いことから、当初から一字金輪仏頂尊像として作られたのかにも疑問が残ります。謎の多い像です。（福形安希子）

連載

高野山の古建築 第三十三回

重要文化財 金剛三昧院（こんごうさんまいいん） 客殿・台所（一）

鳴海 祥博



高野山絵図に描かれた金剛三昧院　赤い多宝塔とその斜め左上に本堂、客殿台所などが描かれている。この時まだ玄関は建てられていない。なお周囲には建物が１棟だけの寺院も沢山見られる。この絵図は18世紀初頭に製作された。

客殿台所の全景　中央の大きく張り出した建物が玄関。その右手が台所。左手が客殿。

「中門」正面の虹梁に彫られた鯉の彫刻　虹梁の中央に魚の彫刻が彫られている。ここは「登龍門」で、この先に龍になるための、厳しい修行が待ち構えていることを暗示しているようだ。

「中門」の全景　玄関を入ると、「中門」と呼ばれる広い板敷きの間がある。左手の杉戸の奥が客殿で、写真には写っていないが右が台所となる。写真の左上に正面の虹梁が少し写っている。

金剛三昧院の正門を入ると、右手に大きな玄関があります。玄関に向かって右の建物が台所、左が客殿です。台所と客殿を玄関で繋ぐ、この建物の配置は総本山金剛峯寺はじめ高野山の寺院に特徴的な独特の形式です。しかも、規模の大小はありますが、建物の形式から部屋の配置まで、どの寺院でも殆ど同じです。高野山のお坊さんは、どこにいても全く同じ生活、同じ修行をしていた、ということなのかもしれません。

この客殿と台所がいつ建てられたのか、残念ながら明らかでありませんが、建物の形式的な特徴から江戸時代の初め、十七世紀前半に建てられたものと考えられています。山内に残る最も古い客殿の例です。

山内寺院に共通する客殿台所の形式がいつから始まったのかは明らかでありませんが、少なくても江戸時代の初めに遡ることを、この客殿は物語っています。

では、玄関から紹介しましょう。玄関は客殿と台所の中間に大きく張り出して建てられています。棟札（むなふだ）によると、この玄関は、宝暦八年（一七五八）に増築されたもので、客殿が建てられた江戸時代の初めには、この大きな玄関はありませんでした。

金剛峯寺に十八世紀初頭に描かれた高野山内の絵図が残されています。そこには総数六七六の寺院の姿が描かれていますが、玄関のある寺院はわずか五つです。それは当時高野山にあった三つの派閥の中心寺院と、宝門（ほうもん）、寿門（じゅもん）という高野山を代表する二つの学問、教学の中心となった寺院だけです。玄関はまさに権威の象徴だったと言えます。

この絵図を見ると、金剛三昧院に玄関は描かれていません。では玄関が建てられたのは何故なのでしょう。それは金剛三昧院の歴代の住職が「寺務検校（じむけんぎょう）」や「門主（もんしゅ）」という高野山の最高位の役職を務めたこと、そして玄関建立の数年前に当時の住職が「碩学（せきがく）」という、学識を認められた、高野山真言密教の指導的地位に就いたことが、権威を表す「玄関」建立の契機だったように思えます。

ところで、絵図を見ると、もう一つ、特徴的なことが分かります。それは山内の寺院には、建物が一棟のものと、客殿と台所の二棟からなるものと、二種あることです。客殿と台所が描かれているのは六七六ヶ寺の内、一〇七ヶ寺で全体の一五％です。客殿と台所、そして玄関を構えた金剛三昧院は高野山を代表する、格式ある寺院の姿と言えるでしょう。

玄関に上がると、正面に「中門（ちゅうもん）」と呼ばれる板敷きの広い部屋があります。中門の正面には虹梁（こうりょう）という梁があって、そこに魚の彫刻が彫られています。お寺に魚は不釣り合いです。なぜ魚なのでしょう。

「登龍門（とうりゅうもん）」という言葉があります。中国の黄河の上流にある「龍門」という滝を登り切った鯉は、天に舞い上がり龍になる、という伝えです。この中門に入った修行僧は「大成して龍になれ」。この彫刻はそういう覚悟を問いかけているに違いない、そう思えるのです。

特集 高野山ケーブルカー 車両入替（前編）

昭和五年（一九三〇）に開通した、極楽橋駅～高野山駅間を運行する高野山ケーブルカー。八七五mの距離（高低差三二八m）を約五分で上ります。

三代目となる車両が、平成三十年十一月二十五日をもって五十四年間の長きにわたる運行を終えました。

前編では三代目ケーブルカー運行終了に伴って開催された、巻上機見学会のようすを中心に特集します。

3代目ケーブルカー

写真上　：11月24日撮影、高野山駅。
　　車両移動のため、屋根撤去中。
写真右上：車体番号。定員は１両あたりの人数。
写真右中：車両内部
写真右下：乗務員室

高野山ケーブルカーの歴史

- 初　代　昭和５年（1930）６月～昭和28年（1953）
  〔編成数〕１両２編成　〔定員〕120人
- ２代目　昭和28年（1953）６月～昭和39年（1964）
  〔編成数〕１両２編成　〔定員〕148人
  ※昭和40年（1965）の高野山開創1150年記念大法会に向けて、大量輸送が可能な３代目ケーブルカーが導入されたため、11年という短期の運行でした。
- ３代目　昭和39年（1964）12月～平成30年（2018）
  〔編成数〕２両２編成　〔定員〕261人
  ※２両連結車両によって定員数が大幅に増え、最大定員数と車両の最大幅（2.996m）は日本一です（2018年時点）。自動運転、自動扉は導入当時としては画期的でした。
- ４代目　平成31年（2019）３月 運行開始予定。

昭和５年の古写真より。初代ケーブルカーと、建設中の高野山駅。
富貴屋提供。

高野山駅 ケーブルカー巻上機

※巻上機・運転台もすべて入替となるので、貴重な写真です。

※ケーブル（鋼索）は従索輪から③案内索輪の向こう（写真左奥）へと延び、車両と繋がっています。

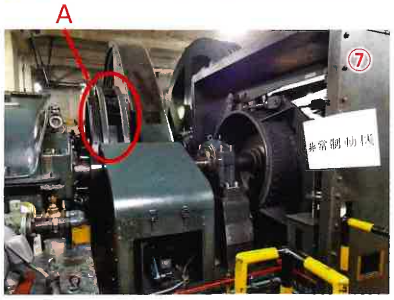
巻上機（多溝型逆転エンドレス巻上機）

場内には３つの大きな索輪（モーターに近い順から①主索輪－②従索輪－③案内索輪）があり、それぞれの直径５ｍは日本一の大きさです。これらの索輪が全長1020m、直径５㎝のケーブルと車両を支えます。ケーブルの太さも日本一です。

①極楽橋駅に向かってのアングルです。前後に並んだ手前の主索輪と、奥の従索輪には８の字にケーブルが巻かれています。従索輪の奥、上の階に案内索輪があります。

電気系統・機械部

モーター（540馬力）を動かすためには3300Vもの電力を要し、場内には④受電設備・⑤制御装置・抵抗器が並んでいます。⑥モーターは主索輪の両側に１台ずつ設置され、巻上機の心臓部分といえるものです。モーターで主索輪を動かすことで、ケーブルを巻き上げます。



⑦ブレーキ（ドラム式空気ブレーキ）

制御装置で減速し、ギアの左脇にある常用ブレーキ(A)と、右奥にある補助ブレーキで停止します。右手前は非常ブレーキです。

※後編（次号掲載予定）では車両入替のようすと、新型車両を紹介します。

⑧運転室

ケーブルカーの運転は車内ではなく、高野山駅で行われます。車内にあるのは乗務員室で、安全確認などを行う、車掌さんの席です。大きなレバーは左から自動／手動切替・アクセル・ブレーキ操作用です。

「古絵図で巡る高野山探訪」（その九）

子院境内墓地

霊宝館だより126号・127号では、奥之院地区の墓地についてお話ししました。本号では、奥之院地区以外にある墓地についてお話しいたします。

子院境内墓地

高野山で五輪塔が祀られているところ、つまり墓地のあるところと言えば、まず奥之院地区が思い浮かびますが、『高野山壇上寺家絵図』（宝永三年〈一七〇六〉金剛峯寺蔵　図1）などの古絵図には、奥之院地区以外の子院地区に墓地が描かれています。

古絵図に描かれた子院境内の墓地のいくつかは現在も存続していますが（図2～7）、絵図に描かれていない子院境内墓地も各所にあります（図8）。

高野山は歴史上、火災が頻発し、子院は焼失後、新たな場所に移転、また廃絶し、その際、子院境内墓地が廃絶したものもかなりあることが考えられます。

図1　『高野山壇上寺家絵図』（宝永3年〈1706〉　金剛峯寺蔵）　※○印は子院境内墓地

発掘調査からみた子院境内墓地

山内各所の子院地区での既往発掘調査地では、多くの五輪塔などの石造物が出土しています。平成十七年（二〇〇五）、大師教会南側の道を隔てたところにある金剛峯寺第二駐車場の建設の際、大乗院跡で発掘調査が行われました。この調査では、室町時代の長禄四年（一四六〇）から延徳四年（一四九二）の年号のある一石五輪塔が多数纏まって出土しました。これらの出土状況は、大永元年（一五二一）の火事によるものと考えられる焼土により埋められていました。

このことから、かつて存在した子院が火災に遇い、子院が山内の他所に移転した際、境内墓地の五輪塔が廃棄され、火災の焼土によって埋まり廃絶したものと考えられます（図9）。恐らく、多くの子院が火災の際、このように境内墓地を廃棄して別の場所に移転したのかもしれません。

石製五輪塔の産地

高野山の石製五輪塔には、鎌倉時代から江戸時代にかけて、大小様々なものがあり、またその主な石材は砂岩、緑泥片岩、花崗岩（御影石）があります。石材の産地としては、砂岩は大阪府和泉地域、緑泥片岩は高野山の北麓を流れる吉野川・紀ノ川の沿岸部地域、花崗岩は兵庫県摂津地域などが考えられますが、それぞれの石材の使用期間は時代によって移り変わり、またその特性に応じて各地の石材が使われました。

長期間にわたり連綿と用いられてきた夥（おびただ）しい数量の五輪塔ですが、どこで製作され、どのように流通して高野山にもたらされたのかは、まだ謎につつまれています。

（鳥羽正剛）

〔図9写真提供・高野町教育委員会〕

図3　蓮華定院境内墓地　真田家墓所（西から）

図2　蓮華定院境内墓地　真田家墓所

図5　安養院境内墓地　毛利家墓所（西から）

図4　安養院境内墓地　毛利家墓所

図7　円通寺境内墓地（南から）　※ご参拝できません。

図6　円通寺境内墓地

図9　大乗院跡発掘調査地　一石五輪塔出土状況
黒い地層は大永元年（1521）の火災による焼土と考えられます。

図8　明王院境内墓地（北から）

高野山の文書（十六）

「高野山諸衆評定置文案」にみえる風呂焚き

学生時代に遅刻や無断欠席をしたとき、罰として廊下に立たされたり掃除をさせられたりした方もおられるかもしれません。実は、中世の高野山においても法会や集会に遅刻、欠席した僧には罰が与えられていました。今回はその罰について記された文書を紹介したいと思います。

「高野山諸衆評定置文案」は鎌倉時代末期の正安四年（一三〇二）六月二十九日に出されました。置文とは、守り行うべき規則などを書いた文書で、鎌倉時代から室町時代によく見られます。「案」とあるのは、案文（実質的な効力を持つ写し）であることを示しています。今回の置文は、三日間行われた陀羅尼会の規則で、二条に分けて書かれており、このうち今回取り上げる罰は第一条に書かれています。

第一条には、「時香（時を計る香）が半分に達したとき、当番の者が出席をとり、その際に欠席で、三日間欠席となった者は一人でも何人でも、大湯屋の『一日湯』（一日中か一日か）を沸かすこと、不平を言う輩は『番湯』（詳細不明）を止めて風呂をわかすこと」とあります。つまり、高野山では風呂焚きが罰の一つとなっていたのです。

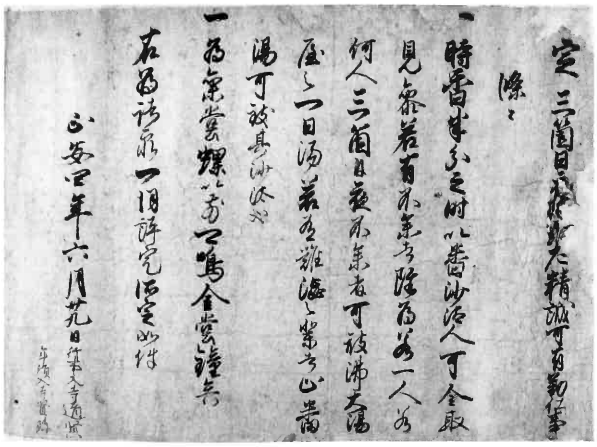
ここに出てくる大湯屋とは、高野山内、現在の総持院の場所にあったとされる湯屋のことで、高僧の忌日などに湯を沸かした事が知られています。江戸時代の絵図には既になく、戦国時代の永正十八年（一五二一）に焼失したようなので、それ以降再建されなかったのでしょうか。現在もどのような姿であったかは不明です。大湯屋というと奈良の東大寺が有名（鉄湯船が重要文化財、一一九七年鋳造）ですが、「高野山大湯屋釜鋳勘録状（断簡）」（国宝『又続宝簡集』一〇九所収）によると、室町時代に高野山の大湯屋の湯釜を新鋳する際に、東大寺に見学に行っているので、湯釜に関しては、東大寺の鉄湯船と似たものだったのかもしれません。高野山の湯屋に関しては、『霊宝館だより』第一二五号「古絵図で巡る高野山探訪（その六）」で詳しく紹介していますので、そちらもご参考ください。

さて、風呂焚きというと現代人の感覚からするとたいした罰ではないかもしれません。しかし、当時は風呂釜の掃除はもちろん、薪割りや水汲み、そこから湯を沸かし、沸かしたお湯を風呂釜に移す作業、そして、たくさんの僧侶が集まる場合はそれだけ大量のお湯を沸かすのですから結構つらい罰だったのではないでしょうか。

高野山における風呂焚きの罰はこの陀羅尼会だけにとどまりません。不断経や大集会、彼岸の行事などの遅刻、早退、欠席。法会の所作の間違い。これらの罰として風呂焚きが充てられた史料も見られます。おそらく高野山ではポピュラーな罰だったのでしょう。「おい、遅れると風呂焚きだぞ。急げ。」僧侶のこのような声が飛び交っていたかもしれません。

（研谷　昌志）

（この文書は冬期平常展には展示いたしません）



「高野山諸衆評定置文案」（国宝『又続宝簡集』所収 金剛峯寺蔵）

〔翻刻文〕

定　三箇日夜陀羅尼精誠可有勤仕事
　　條々
一、時香半分之時以番沙汰人可令取
　見参若有不参者雖為若一人若
　何人三箇日夜不参者可被沸大湯
　屋之一日湯若有難渋之輩者止番
　湯可致其沙汰也
一、為参堂螺以前可鳴金堂鐘矣
　右為諸衆一同評定所定如件
　　正安四年六月廿九日
　　行事入寺　道賢
　　年預入寺　賢珍

高野山霊宝館からのお知らせ

◎ミュージアム法話

本年度も毎回ご好評をいただき、無事終了いたしました。

平成30年度　法話日程と担当者報告

- 5月12日(土)
  永田道範師（奈良・寶國寺）
- 6月16日(土)
  井上裕径師（高野山蓮華定院徒弟）
- 7月7日(土)
  神保博舟師（兵庫・法心寺）
- 7月21日(土)
  丸山宗皇師（愛知・瑞光寺）
- 8月4日(土)
  井上裕径師（高野山蓮華定院徒弟）
- 8月18日(土)
  富田向真師（高野山高校教諭）
- 9月15日(土)
  西　悠円師（福岡・遍照院）
- 10月20日(土)
  森田眞源師（長崎・弘仁寺）

平成31年度も日程が決まりましたら、本紙やホームページでお知らせいたします。

◎ミュージアムトーク

（展示解説）

- 11月3日(土)
  〔金剛峯寺「六波羅蜜」イベントの一環として開催〕
- 11月23日(金)・(祝)
  担当学芸員による、秋期企画展「〝香り〟の荘厳」の展示解説を行いました。紅葉シーズンと相まって、多くの方にご参加いただきました。

◎金銀銅杢目金（きんぎんどうもくめがね）　薫炉（くんろ）（銘：金剛峯（こんごうぶ））奉納と特別公開

11月8日に金剛峯寺に奉納されました、「金銀銅杢目金　薫炉（銘：金剛峯）」を秋期企画展後期期間（11／27～1／14）に特別公開いたしました。

秋田県の伝統金工職人である林美光（はやしびこう）氏によって制作・奉納された香炉で、霊宝館に収蔵されました。

杢目金は数種類の金属を溶着し、叩き伸ばして杢目（年輪とは異なる、木材の表面にあらわれる紋様）のような模様を作り出す技法で、後世にその技術を伝える宝物として、今後も不定期公開されるかと思います。

薫炉　展示風景

◎台風21号による小宝蔵屋根破損修理

昨年9月の台風21号により被害を受けた、霊宝館小宝蔵の屋根の修理が12月より始まっています。春には完了予定で、現在も作業が続いています。

小宝蔵　修理状況

◎友の会会員募集

高野山霊宝館では友の会会員を随時募集しております。

- 会員証提示で会員本人のほか同伴者3名様まで霊宝館と金堂・大塔の拝観無料
- 年4回発行の機関誌「霊宝館だより」送付

〈年会費〉

一般会員（個人）　3、000円
賛助会員（法人）　30、000円

皆様のご入会をお待ちしております。

〈お問い合わせ先・申込先〉

高野山霊宝館　霊宝館友の会係
（電話0736―56―2029）

新連載 高野山でお茶しましょ ①

最近、高野山ではカフェが増えています。霊宝館で拝観したあと、ちょっと休憩したい。そんな時におすすめのカフェ・喫茶店を少しずつ紹介していきたいと思います。　（掲載情報は2018年12月時点のものです。）

天然石工房（てんねんせきこうぼう）＆カフェバー　心星（しんせい）

店内にはカラフルな天然石がずらりと並び、好みのブレスレットを作ることができます。マスターの奥様によるカラーセラピーも随時開催。

住所：高野山809　ウエストサイド1階
　　大門より300m、信号交差点 角
電話：0736－26－7160
営：　8:00－22:00（カフェは18:30まで）
休：　水曜
座席数：テーブル4　12席
軽食あり　喫煙可
駐車場：なし（近くに無料の愛宕前第一駐車場あり）

2012年3月OPEN。大阪出身のマスターは日本バリスタ協会認定のライセンス保持者。当初は天然石販売をメインとしていましたが、ラテアートとの出会いをきっかけにコーヒーにこだわり、本格的なカプチーノやエスプレッソを味わえるお店となっています。おすすめはカプチーノ、エスプレッソ、カフェラテ。2018年秋より夜はバー営業を開始し、お酒メニューも充実。「海外のお客様も認めるコーヒー。バリスタ資格を保有する、プロの味をお届けします」。

カプチーノ（430円）はきめの細かい泡が特徴。こうやくんや梵字（写真は金剛界大日如来をあらわす「バン」）のほか、動物のラテアートも。奥のピザトーストは具だくさんで、高野山散策で空いたお腹も満足。

特選呉服（とくせんごふく）　宮崎呉服店（みやざきごふくてん）
茶房（さぼう）　みやざき

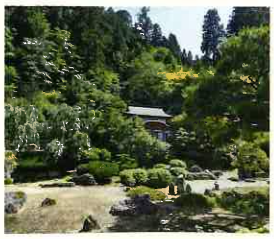
外観・内装のデザインには非常にこだわったという店内は、畳にテーブルというスタイル。ネコに囲まれてゆっくりくつろげる空間です。ネコ率高めの和雑貨販売コーナーも併設。

住所：高野山234　大門より80m
電話：0736－56－2303
営：　10:00－17:00　（冬期は10:30－16:00）
休：　水曜　冬期は不定休
座席数：16席
ランチあり　禁煙
駐車場：2台　　インスタグラム：sabou.miyazaki

老舗呉服屋さんの一部をカフェに改装し、2018年6月にOPEN。「和モダン」と「ネコ」をコンセプトとし、「ネコが居ないネコカフェ」と言われるほど、いたるところにネコをモチーフとした内装やグッズが。おすすめは京都から取り寄せる、こだわりの抹茶を使った飲み物。日替わりランチ（980円＋税）やカレー、うどんなどがあり食事にも利用できます。

抹茶セット（700円＋税）は季節の和菓子とともに。フレーバーティー各種（写真はストロベリークリームティー）や、ネコクッキーがかわいい抹茶シフォンケーキなど、和洋のドリンクとスイーツが楽しめます。

西南院（さいなんいん）カフェ



時々お寺を訪ねるという若いお坊さん。お気に入りは抹茶ラテだそう。

住所：高野山249　大門より100m
電話：0736－56－2421
営：　10:00－17:00
休：　年中無休
軽食なし、昼食（本格的な精進料理）は前日までに要予約
禁煙
駐車場：あり（境内）

高野山の宿坊の1つ。気軽に入ることができるお寺を、と2017年6月にカフェをOPEN。テイクアウトスタイルのドリンクは各500円。ご住職自らコーヒーを淹れることも。おすすめはカフェモカ。和室のテーブル席でくつろぐだけでなく、ドリンクを手にお寺の中を見て回ったり、庭園を眺めたりすることもできます。「当院自慢の日本庭園をご覧いただきながら、ゆっくりとお過ごしください」。

春は桜や石楠花、秋は紅葉が美しい西南院。甘い香りと、ほんのりピンクの泡が特徴のさくらラテ（右）が合いそうです。ご住職が慣れた手つきで作ってくださった、カフェモカ（左）はコーヒーの苦みとチョコの甘さが絶妙。本堂木鼻〔きばな〕の彫刻（獏〔ばく〕）をモデルにしたキャラクター「バックンとクーチャン」のイラストが入ったカップがかわいい！

※次回は 132 号掲載予定です。